

令和8年度

日章学園

# 鹿児島育英館高等学校

入学試験問題

## 国語

(時間 45 分)

(注意)

- 1 「始め」の合図があるまで、このページ以外のところを見てはいけません。
- 2 問題は、12 ページあります。解答用紙は1 枚です。
- 3 「始め」の合図があったら、まず解答用紙に受験番号、中学校名、氏名を記入しなさい。
- 4 答えは、必ず解答用紙に記入しなさい。
- 5 印刷がはっきりしなくて読めないときは、だまって手をあげなさい。問題内容や答案作成上の質問は認めません。
- 6 「やめ」の合図があったら、すぐ筆記用具をおき、解答用紙だけを裏返しにして、机の上におきなさい。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

方言は日本語の宝だ。

X

方言で話されると、どの方言でもその人の人柄が出てくるような気がしてくる。体温が伝わってくる言葉なのである。個人としての体温というよりは、風土全体がからだの温もりとして伝わってくるというイメージだ。今時は共通語はテレビを通して十分身につけることができる。共通語が話せなくて困るということは、ほとんどない。いま必要なのは、むしろ方言の教育だ。ところが、生徒手帳にかつては「方言の使用を禁止する」という項目を掲載していた地方もあるほどで、その方言撲滅運動の成果もあってか、全国で方言能力の急激な低下が見られる。

この衰退は深刻だ。現在八十代の方は、方言を使いこなすことが相当できる。五十代になると、その三分の一程度の方言能力しか有していない感じがする。これは、各地を訪れるたびに、自分と八十代の人を比較してどの程度の差があるか、と私が聞いた際の答えを参考にしている。二十代になると、方言能力は急速な低下傾向を見せる。関西の言葉のように、テレビで大きな勢力を持っている言葉は比較的廃れていない。しかし、鹿児島弁などは、方言の代表選手のような魅力を持っているにもかかわらず、若い人は喋らなくなってきたのだ。これはまったく看過することのできない事態である。

言葉には本来、肌触りや温もりというものがある。その言葉の語感に、意味が雰囲気として含まれているのだ。その土地固有のイントネーションもある。方言は一つの別言語だ。方言を話すためには、「方言モード」に身体のリズムをチェンジさせる必要がある。いわゆる共通語を淡々と話す人を相手に自分だけが方言を話すというのは意外に難しいものだが、地元の人や家族と電話で話すときには、すぐに方言モードに切り替わる。その切り替えは、人格の切り替えさえも感じさせるほどに鮮やかである。

私が監修をしているNHK教育テレビの「にほんごであそぼ」という番組で、宮沢賢治の「雨ニモマケズ」を全国各地の方言でやってみてもらっている。この詩は、作品として発表されたのではなく、宮沢賢治の手帳から発見されたものだ。自分自身に対する祈りの言葉として書き付けられたものだ。宮沢賢治のこの詩は、方言のきついものではない。しかし内容には岩手の厳しい風土が浸透している。それだけに、他の地方の方言に直してしまうとどうなるのか。ポウケンの要素もあった。

結果は、驚くほどの成功であった。宮沢賢治の真摯な祈りが、全国の方言でしっかりと表現されていた。南の鹿児島言葉でも、肌触りのある言葉とイントネーションで、この詩の一番肝心の核となる感情はきっちり伝わってきた。では同じ作品

かと言えば、そうではない。違う作品に仕上がっている。これが方言の言語としてのすばらしさだ。どのようなテキストも、自分の色に染め上げてしまう。

**b** そのテキストの持つ生命力は失われない。方言を話しているときに感じる懐かしさ、というものがある。身体全体が緩んで温かくなる感じた。だから、方言でのコミュニケーションが衰退することによって、身体の冷えが進んでしまう。しかも、方言はある世代で衰退すると、自然に復活することは期待しにくい。意識的な方言教育を、学校やメディア、家庭で本格的に行う必要性があるのだ。それほどに切迫した状況なのである。

コミュニケーションのおもしろさは、知らないうちにお互いの癖を味わい合っているところにある。情報伝達だけがコミュニケーションの目的ではない。むしろ、生身の身体から発せられる癖を自分の身体で受け止め、投げ返す。そこに醍醐味がある。

**c** 普通の会話が「漫才」に似るときがある。片方が「ボケ」をやり、もう片方が「ツツコミ」を自然にやっているケースだ。夫婦でも、こうした漫才のような役割分担ができている場合がある。当人は漫才と意識しているわけではないとも、周りから見ると楽しめる。大阪では、幼い頃から日常会話でボケとツツコミの訓練をしているようだ。これはもはや技の域に達している。片方の癖に対してもう片方が癖で対応する、というコンビネーション・プレーがうまくいくと気分がいい。

たとえば女子中高生同士の会話は、会話の内容以上に、会話の癖を共有するところに特質がある。十代の女の子特有の話し方の癖をマスターしなければ、会話に入りにくい。職業によっても会話に癖が出てくる。教師生活が長いと、どこことなく教師臭さが話し方から抜けなくなる。私の知っている例では、予備校の古文の先生が妙に女言葉を使うので不思議に思っていたら、本務校が女子大ということであった。女子大生の言葉づかいの癖が自分に乗り移ってくる。

**d** 彼女たちにわかりやすく説明するために、自然にドウチョウしているのだ。昆虫は、捕獲されないように、「ギタイ」を使うことがある。木の葉に似せた形に自らをジョジョに変えていく。言葉にも「ギタイ」という技があるのである。会話の癖を身体に取り込むことで、仲間に入るのである。

癖は（e）である。意識的なものではなく、やめようと思っても簡単にはやめられない。その点が技とは違っている。技は出すべき時に出すものである。状況に応じてコントロールでき、しかも効果的であることが技の条件である。コミュニケーションには、そうした「技」の修練も必要なのだ。しかし、皆が会話上手になることだけがいいわけではない。ビジネスの場面などでは効率性が要求されるので、コミュニケーションは上手であるほどいい。しかし、日常の生活では、上手い下手より

も、会話の癖をいかに味わい合うことができるか、ということがむしろ重要になる。

ゆっくり言葉を探す癖の人がいる。そのテンポにイライラする人は、その癖を味わってはいない。ああ、また言葉を探しているな、と感じ取り、その言葉探しの時間を味わいながら待つ。そうできる人は、相手の癖を楽しみに変えているといえよう。谷崎潤一郎に「幫間<sup>ぼうかん</sup>」という短編がある。本来は旦那衆の身分にある桜井という男が、自ら進んで太鼓持ちになる話だ。太鼓持ちは旦那衆におべっかを使い、ヨイショする。腰が低くて、もみ手してへつらう身体でなければ太鼓持ちとは言えない。話し方も太鼓持ちらしい癖を味として出す必要がある。「<sup>3</sup>くでげすな」といった、いかにも太鼓持ちらしい言葉づかいを身につけることで、他の人との距離感をつくっていく。桜井が<sup>3</sup>こうした話し方をわざとすることで、周囲も彼の取り扱い方に慣れていくのだ。

話し方の癖は、生き方のスタイルと関係している。言葉は意味を伝えるためのものだけではない。言葉を発する身体が乗り移っている。他者との距離の取り方が、言葉の端々にあらわれる。逆に言えば、言葉の端々から、その人の対人関係の癖を見抜くのが、<sup>4</sup>コミュニケーション力である。

(出典 齋藤 孝『コミュニケーション力』より)

問一 傍線部A～Gのカタカナは漢字に直し、漢字は平仮名に直して書きなさい。

問二 傍線部(1)「体温が伝わってくる言葉」とありますが、どのような言葉ですか。説明として適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア そのひとの性格がわかる言葉

イ その土地の風土がわかる言葉

ウ そのひとの今の気持ちが変わる言葉

エ その土地の位置や歴史が変わる言葉

問三 傍線部(2)「その点が技とは違っている」とありますが、「技」とはどういうものですか。次の空欄に合うように、三十字以内で答えなさい。

技とは【 】であるもの。

問四 波線部(i)「で」と働きが同じものを、本文中の二重傍線部ア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

問五 傍線部(3)「こうした話し方をわざとする」とありますが、それはなぜですか。簡潔に説明しなさい。

問六 空欄 a) d) に入る言葉として適当なものを、次からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア たとえば イ そして ウ しかし

エ だから オ あるいは カ なぜなら

問七 傍線部(4)「コミュニケーションカ」とありますが、これはどういうものだと、本文で述べられていますか。適当でないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア お互いの気持ちを言葉にして伝えるもの。

イ 相手との距離を癖によって図れるもの。

ウ 相手におべっかを使い、ヨイシヨするもの。

エ 職業にふさわしい言葉を常に使えるもの。

問八 冒頭の空欄 X) に入る文として意味が通じるように、次の㉠㉡を並び替え、例のように答えなさい。

(例) ㉠㉡㉢㉣㉤

㉠ そこで培われた人間性や人間関係の取り方も相当差異がある。

㉡ 日本は狭い国土ながら、南北に長く伸びている。

㉢ 方言には、そうした風土の違いが色濃く染み込んでいるのだ。

㉣ 気候・風土が相当異なる。

問九 空欄(e)に入る適当な言葉を漢字二字で考えて答えなさい

問十 波線部(ii)「ある」は動詞ですが、活用の種類を答えなさい。

問十一 次の会話はこの文章を読んだ四人の生徒の会話です。文章の内容に合った発言をしている生徒はどの生徒ですか。適

当なものから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 生徒A 方言は標準語と違ってみんながわかるものではないから、コミュニケーションにはふさわしくないものなんだよね。

イ 生徒B でも、その人の方言の特徴を知ることですその人の人柄がわかるから、コミュニケーションを高めるには各地の方言の勉強をするべきだよ。

ウ 生徒C 方言の特徴を知るだけでなく、その人の話し方の癖を見つけて楽しむことで、コミュニケーションを楽しめるね。

エ 生徒D でも、相手に気を遣って相手に合わせるよりも、自分の言葉遣いを直していくことが重要だから、自分の方を直した方がいいよね。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

古書店『無窮堂』で二十五歳という若さで店主を務める本田真志喜と、その幼馴染で同じ古書の業界に身を置く瀬名垣太一。瀬名垣の父親は古書業界の嫌われ者だったが、その才能を見抜いた真志喜の祖父に目をかけられたことで、幼い二人は兄弟のように育つ。古く根深いしきたりの残る古書の業界に、若くして身を置く二人は、様々な出来事を通し、より深い絆で結ばれていった。

いつものように瀬名垣太一が『無窮堂』を訪れたとき、本田真志喜は番台に座って頬杖をつき、考えごとをしているようだった。

「よう、真志喜」

と声をかけると、

「なにか用か」

と（X）返される。

「おいおい、早くもポケたんじゃねえのか？ 今日のは神社の祭りに行くって言ってただろ。鳥居のところまで待っても来ないから、迎えにきたんだよ」

「ああ、そうだった……」

真志喜は、明らかに心ここにあらざといった感じで立ち上がった。「母屋の戸締まりをしてくる」

瀬名垣は店内を見回し、棚を確認した。真志喜がこんなふうにはんやりするのは、たいてい、納得のいかない商いをしたときなのだ。

真志喜の愛する古本たちは、わずかな埃のにおいを纏わせながら、今日もひっそりと棚に並んでいた。変わった様子は特にない。ただ、棚が少しすいているようだ。本の補充や入れ替えをきちんとする真志喜にしては珍しい。瀬名垣はポケットから煙草を取り出し、火をつけないまま一本くわえた。

やがて真志喜が母屋から戻ってきた。瀬名垣の煙草にも気づかず、「待たせた。行こうか」と下駄を履く。これはやはり尋常ではないぞ、と瀬名垣は思った。

夕暮れの道を連れ立って歩く。瀬名垣は真志喜のほうに煙が行かないよう、半歩遅れた位置から尋ねた。「なんかあったのか？」

真志喜がちよっと振り返る。瀬名垣はほとんど条件反射で、かがんで地面で煙草を消し、パラフィン紙で手製した小さな封筒に吸い殻を入れた。これでもう文句はないだろうと、真志喜の横に並ぶ。

「本を愛するひとは」

と、真志喜は話しはじめた。「所有欲が強いんだそうだ」

「うん？」

「おまえ、そういう自覚があるか？」

「……どうかな」

なにかを試されてるのか？ とわずかに動揺しながら、瀬名垣は答えた。

「私はある」

と真志喜は言った。「本当はすべての本を店に留めておきたいところが、本の幸せを願って、（Z）思いで売りに出しているんだ。『すごく女性が好きなのに置屋の主人になってしまった男』みたいな気持ちだ」

「あのな。そのたとえは、なんか違うと思うぞ」

と、瀬名垣は言った。「そしておまえはいつたい、なにを言いたいんだ」

二人のあいだに、しばらく沈黙が落ちた。雑木林の周辺には薄闇が漂い、その向こうから、提灯の赤い火と物悲しくも華やかな祭囃子が、かすかに透けて届く。ぬるい空気は、肌に触れるとそのままじっとりとした汗に変わった。

真志喜は小さくため息をつき、意を決してこの次第を語りだした。

『無窮堂』に、よく本を売りにくる男がいるんだ。四十代ぐらいかな。いつもパリッとした服を着ている。うちで本を買っていくことはないが、持ってくるものは面白くて変わった本ばかりだ」

「いいお得意さんだな」

「ああ。私は高い値で買っていたよ。だけどこの前、気づいてしまったんだ。そのとき男が持ってきた十五冊の本が、神田の『古書飛鳥』の棚に並んでいたものと、そっくり同じだったことに」

「……どういうことだ」

瀬名垣は真志喜の表情をうかがった。真志喜はうつむきがちに、下駄の音を響かせた。

『古書飛鳥』で買った本を、うちに売りにきたんだろう。私はすごく好意的に、そう考えることにした。棚一段に並んでいる本を、ごっそり十五冊も買うなんてことはほとんどあり得ない、とわかっていたのに」

「そいつは、盗んだ本を売りさばっていたんだな？」

「そう。今日もその男が本を売りにきた。私はなにくわぬ顔で買い取りをし、その後、店内を見てまわっている男を注意深く監視した。男は棚の陰で手早く、うちの本を黒い布の袋に十冊ばかり詰めこんだよ」

「酷いな、そりゃ」

瀬名垣は憤りを鎮めるために、再び煙草を吸うことにした。真志喜も今度ばかりはそれを黙認する。

「ほうぼうの古本屋で本を万引きして、それを別の古本屋に売って暮らす、か。いじましくて汚い手を使いやがる。真志喜、そいつをどうした。警察に突きだしたのか？」

真志喜は首を振った。

「私は番台から下りていって、本を棚に戻すように言ったよ。それから、二度と来ないでくれと店から放り出した」

「甘いんじゃないの？」

「明日、市いちに行ってみんなにその男の人相風体を伝える。たぶん偽名だろうけれど、彼が台帳に記入した名前と住所も。これで、少なくとも関東では、彼は『商売』でできなくなるだろう」

狭い業界だ。店についても客きやくについても、悪い噂はすぐに広まる。古書こしょを物としてしか扱あつかわなかった男は、古書の世界から逆襲を受けるのだ。永遠に閉め出され、甘い蜜みつを吸うことは二度とできなくなる。

「私が衝撃を受けたのはね、瀬名垣」

真志喜はひそやかに言った。「男の本性を見抜けず、まんまと騙だまされていたということももちろんあるけれど、それ以上に、うちの本が袋に詰めこまれるのを見た瞬間、すごく傷ついたんだ。傷ついた自分に、とても驚いた」

瀬名垣な煙を吐き、煙草を持たないほうの手で、真志喜の背中を軽く叩たたいた。

「傷ついて当然だろ。おまえの大切たいせつにしている本が盗まれるところを、目撃しちゃったわけなんだから」

『無窮堂』にある本は、正確に言えば私の本じゃない。ふさわしいひとの手に渡るまで、私が預かっているだけだ。いつも自分にそう言いいかせていたはずなのに、いつのまにか愛着を抱かかりてしまっている自分に気づいて、愕然がくぜんとした」

「どうにも、本に囚とらわれてるからなあ、おまえも俺も」

瀬名垣は苦笑いした。

神社の鳥居が見え、砂が鳴るような人々のざわめきが聞こえた。鳥居の手前に設置された赤い灰皿に、瀬名垣は吸いさしをつっこむ。

「ほら、みすずちゃんのご登場だ」

人でごった返す参道から、外山みすずが駆け寄ってくる。彼女の後ろには、焼きそばやらリングあめ餡やらヨーヨーやら射的の景品やらを両手に持った秀郎が、うやうやしく付き従っていた。

「真志喜ちゃん、遅ーい。なにしてたの。たいっちゃんが呼ばないと動かないんだから。そのうち古本と一緒にあの店で土になっちゃうよ？」

まさか祭りに行く約束自体を忘れていたとも言えず、「ごめん、お客さんが引かなくて」と真志喜は謝った。

みすずは真志喜の腕を引っぱるようにして、屋台の建ち並び参道へ導いた。

「真志喜ちゃん、金魚すくい得意でしょ？ 赤くて可愛いのがいるのよ。秀郎は出目金ばかり狙っちゃって駄目なの」

「やりたくないな。金魚屋のおやじが首をくくりかねない」

「しよってるわね」

みすずは笑った。「リング餡をあげるから、やってちょうだい」

秀郎がすかさず、真志喜にリング餡を差し出す。赤い果実を砂糖で封じこめた菓子を、真志喜はしぶしぶ受け取った。

「ほらほら、早くー！」

半ば小走りになったみすずを、秀郎が追う。真志喜と瀬名垣は屋台を覗のぞきながら、二人の後をゆっくりとついていった。

「今夜、泊まっていいもいか？」

おもむろに、瀬名垣が真志喜に尋ねた。真志喜が、「いいけど」と答えると、彼はさっそく屋台でカップの日本酒を買った。思う存分飲むことにしたのだ。

「実はな、真志喜。俺はさっき、ちよ(4)っと嘘をついた」

「どんな？」

「所有欲も愛着も、本当はものすごくあることを自覚してる。いつまでだって撫なでくりまわしてじっくり味わいたいし、だ

れにも渡すもんかと、いつもいつも思ってるんだ」

ちようどリンゴ飴をかじっていた真志喜は、甘さのためか、眉まゆを寄せた。

みずが、「ねえ、見て」と呼ぶ声が出た。

「月が出てる！」

見上げると、空には白い真円が浮いていた。

さざめきと熱気、食べ物のおい、夜のはじまりに溶けていく笛の音。そして、それらの中に等しく身を預けている、近いひとたち。

名づけられない大切なものが、そこにはたしかにあった。

しばし立ち止まって月を眺めていた真志喜は、しかめっ面を作って瀬名垣に視線を戻した。

「で、いまのはなんの話だ？」

と、真志喜は聞いた。瀬名垣は笑った。

⑤「まだまだ修行が足りないって話さ」

(出典 三浦しをん『月魚』より)

(注) \*1 置屋…芸者や遊女を抱え、料亭や茶屋などの客の求めに応じて、それらを派遣する家のこと。

問一 空欄 (X) (Z) と波線部 (Y) について以下の問いに答えなさい。

①空欄 (X) に当てはまる慣用表現として適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア あじけなく イ おとなげなく ウ なにげなく エ そっけなく オ あっけなく

②波線部 (Y) 「心ここにあらず」の様子を表す言葉を本文中から四字で抜き出し答えなさい。

③空欄 (Z) 「」 「思い」は「苦渋の決断」という意味の言葉です。「」に当てはまる言葉として適当なものを

次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 腰が抜ける イ 断腸の ウ 掌中の珠の エ 自腹を切る オ 舌先三寸の

問二 傍線部 (1) 「本の幸せ」とはどのようなことですか。「…こと」に繋がるように本文中から十二字で抜き出し答えなさい。

三

問三 傍線部(2)「その男」が指す人物として適当なものを本文中の波線部a～eから全て選び、記号で答えなさい。

問四 傍線部(3)「甘い蜜を吸うこと」とは具体的にどうということですか。本文中から三十字程度で探し、始めと終わりの三字を抜き出し答えなさい。

問五 傍線部(4)「嘘をついた」とありますが、「嘘」の内容を簡潔に説明しなさい。

問六 傍線部(5)「まだまだ修行が足りない」とはどういうことに対しての言葉ですか。適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 古書を盗み転売していた男の本性に気が付けず騙だまされていた自分のこと

イ 本に対する愛着や所有欲が強すぎて抑えきれずにいる自分のこと

ウ 好きなもの(人)や大事なもの(人)への思いを素直に言えない自分のこと

エ 古書店の店主なのに本への愛着が次第に薄まっていつている自分のこと

オ 身の回りにある大切なものに名前を付けられないほど気づけていない自分のこと

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

(1) ものを引き延ばして、時失ふ者ありけり。

人の早苗植うるころ、種ほどこしてけり。

(2) 葉月のころ、穂の出でたるに、嵐吹きてければ、「花散りぬ」と嘆くを、

あまりにも急ぎし給へばこそあれ。

わが稲は、この頃植ゑにしかば、嵐のわざはひにもあひはべらずと、

人にたかぶりけり。

人の刈り收むるころ、少しばかり穂の見えたるが、はや霜の置きてければ、みな枯れぬ。

「ことしはいと早う霜の置きしなり」とて、年をのみ罪していまだ悟らざりしとなり。

(出典 松平定信『花月草紙(かげつそうし)』より)

(注) \*1 早苗・・・稲の苗

\*2 年をのみ罪して・・・その年の天候の不順のせいにして

問一 傍線部 (a) 「植ゑ」(b) 「早う」を現代仮名遣いに直し、全て平仮名で書きなさい。

問二 傍線部 (1) 「人の早苗植うるころ、種ほどこしてけり」を現代語訳になおした時、次の文のようになる。( ) にそれぞれ適当な助詞を入れて、現代語訳を完成させなさい。

人 ( ) 稲の苗 ( ) 植えるころ ( ) 稲 ( ) 種 ( ) 植えた。

問三 傍線部 (2) 「葉月のころ」について以下の問いに答えなさい。

① 「葉月」は現在の暦で何月ですか。漢数字で答えなさい。

② 「ものを引き延ばして、時失ふ者」の育てる「稲」は「葉月のころ」にどのような状態ですか。適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 種の状態      イ 早苗の状態      ウ 稲穂が実ってきた状態      エ 稲穂が完全に実った状態

問四 本文の中で登場人物が話した台詞に「」が付いていないところが一カ所あります。その部分を本文中から探し、始めと終わりの四字をそれぞれ抜き出し答えなさい。

問五 傍線部 (3) 「嵐のわざはひ」とは具体的にどのようなことですか。本文中の言葉を使って答えなさい。

問六 傍線部 (4) 「人たかぶりけり」とはどういうことですか。適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 他の人に興奮した様子で話をした。

イ 他の人に怒った様子で話をした。

ウ 他の人に偉そうな様子で話をした。

エ 他の人に困った様子で話をした。

問七 次の会話はこの古文を読んだ三人の生徒の会話です。本文の言葉や内容を元に、空欄①～③に当てはまる言葉を考え、書きなさい。また空欄④に当てはまる文を選択肢から一つ選び、記号で答えなさい。

生徒A 「この話に出てくる「ものを引き延ばして、時失ふ者」というのは、物事を先延ばしにして、かえって無駄に  
( ① ) を失ってしまいます人のことだよね。」

生徒B 「そうそう。稲の苗を他の人より遅く植えたことで ( ② ) の影響は受けなかったけど、( ③ ) の影響を受け

て枯れてしまったようだね。」

生徒C「稲が枯れてしまったのは残念だけど、やるべき時にやるべきことをしないと、自分が損することになるってことだね。」

生徒B「そうだね。他にもこの話から学ぶことあるかな？」

生徒A「この人の残念なところは、「ことしはいと早う霜の置きしなり」と言って（ ④ ）ところだと思う。」

生徒C「確かに。これは私たちも気をつけた方がいいね。」

#### 【空欄④の選択肢】

- ア 物事の適切なタイミングを逃してしまったことを他人のせいにした
- イ 稲の花が散ってしまったことに気付かず、周りの人に自慢していた
- ウ 自分の植えた稲がどんな環境でも実るものだと思っていた
- エ 少し穂が実った段階で霜が降りる前にと刈り取ってしまった
- オ 稲が枯れた理由を氣候のせいにして、自分の悪い所に気づかなかった